

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

最終章

Beyond the Portal

峯村 明



リ・コンストラクション

登場人物

最終章・Beyond the Portal

384. 同僚たち 1

385. 同僚たち 2

386. 踏み込む

387. 天の川の暗黒部分

388. ベネトナシュ逃走

389. ハイヤーン博士

390. 父と母と

391. 扉の彼方

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
A. V. ラウレンス	H&L財団代表
河合 ヤスオ	H&L財団・スポーツ部門勤務
アマセオ	世界の果ての島出身の男
シパド	冥界王の協力者
ハイヤーン	ネウトラ評議会を代表する科学者
コウイチ・ソフィア	健の両親

最終章・Beyond the Portal

384. 同僚たち 1

バルコニーで繰り広げられている一幕から退いて、ラウレンス氏と河合ヤスオは、その様子をじっと見守っている。

父から仕事(H&L)を引き継いだ時、彼はこう言いました。

『魂の求めるままに』、その理念をこの世界で生きるには様々な壁が立ちふさがるだろう。楽な仕事ではない。陰しく辛い道かもしれない。

不思議に思いましたよ。『魂の求めるままに』、そう生きることに、なぜ壁が立ちふさがり、陰しく辛いのだろう。

世界各地をめぐる、情熱に燃えて生きる人々を見つけるたび、その疑問が少しずつ解けていきました。

人間は肉体だけの存在ではないのです。燃える炎、情熱の息吹を内に持っているんです。内なる熱の衝動が肉体を動かすと、人間は光を迸らせ、とんでもない力を発揮するのだとわかったんです。人は自分で思っている以上に、はるかに、大きくて偉大な存在なんです。

しかし、そのことを好まぬ者がいた。人が己の偉大な力に気づき力を発揮することを、好しとしない者がいた。なぜなら、人間がそのことに気づいてしまうと、彼らを凌駕してしまうからです。

その者は、人間は肉体だけの存在だと説いた。魂などというものはあり得ない、絵空事である、とね。

そして、さらにこう言った。これこそが真実である。真実を信じぬ者は罰を受けるだろうと。

直線時間で二万年の昔、私たちは今とは違う名前、違う姿で生きていたことを知っています。それぞれが異なる人生を歩んで、やがてそのことを自ら思い出し、集合場所のひとつ、H&L財団にたどり着いて、気のせいでも錯覚でもない、事実だったと知ったのです。

魂などというものは"オカルト"であり、絵空事であるとの説が、事実と違うことを私たちは知っている。けれど、知らない人々の方が圧倒的多数。ここで真実を旗印に多数派を相手にしたらどうなります？ おそらく相手にもされず、簡単に打ち負かされます。常識知らずと嘲笑され、孤立する恐れがあります。

常識から外れたものを追求することは社会的なリスクにつながるのです。

財団創設者はそのことをよく理解し、恐れてもいました。少しずつ集まってきた人々がバラバラになる危険もありました。『財団』とは表向きの名前で、実際は、『魂の求めるままに』生きることを掲げた秘密結社みたいなものです。

この世界の多数の人々が信じている教えとは相容れないゆえに、必要以上の注意を引かぬよう、財団を名乗っていたのです。しかし、さすがにエンリルは何かに気づいて、ベネトナシュを送り込んできた。ベネトナシュはウィンディ・サトウを使って財団の機密情報を盗んだというわけです。機密情報の中身はアレクサンドラ・ドストエフスカヤ氏の自作の、恋の詩、エンリルは解読するのに四苦八苦しているでしょうよ。愛は数値化できません。愛を理解できない彼らのメンタリティからは、恋の心はかけ離れていますから。

前任者だった父は、私にある助言をしました。

決して、多数派に属する人々と対峙してはならない。H&L財団は己の領分から出てはならない。人々の背後の"存在"と対峙するのは別の組織の役目であるから、と。

その意味が、今ようやくわかりました。別の組織とは彼(シパド)らのことだったのだ。

H&Lは秘密を運ぶ組織の一つ。ポルタアウレアもそうだった。世界には、まだ私たちが知らない組織が存在するに違いありません。それらがひとつまたひとつとつながっていき、やがて——世界は変わる。

それは分断も生存競争もない、人があるがままに生きられる世界です。

385. 同僚たち 2

あのポータルをくぐるといきなり猛烈なエネルギーが渦を巻いているというのは、シパドの誇張でしょう。健を脅し、くぐり抜けを思いとどませよう、というね。

イリチヤが送って来た画像を見ればそういうことです。あのポータルの向こうには、その人固有の周波数の世界、その人が求める世界が広がっている。だから、健は必ずイリチヤを見つけ出し、バランケはバラムを見つけ出します。

河合ヤスオは、ラウレンス氏に不安な目を向けずにいられない。「見つけ出したとして——帰って来られるのかい？」

ラウレンス氏は肩をすくめてみせた。「予想もつかないことを心配したって、始まりませんよ、ヤスオ。ただ……私としては、ポータルの向こうへ行ってみたい」

河合ヤスオは、ええっ、とのけぞる。「ほ、本気ですか！！」

「まあ半分ね。私はね、もう一度会いたい人が、たくさんいるんです。たとえばネウトラ評議会時代に私を導いてくれた人、たとえばあの時生き別れになった両親、たとえば……」

夢見るようにラウレンス氏は語る。彼の故郷は巨人族の襲撃で壊滅した。もちろんそこに住んでいた人々が無事に生き延びたとは思えない。ヤスウの過去も似たようなものだ。ヤスウの肉親は評議会本部から遠くない所に住んでいた。もう一度会いたかった、いまだに心のどこかにその思いがくすぶっている。生木を引き裂かれる苦痛と一緒に。

ポータルをくぐれば——もう一度会えるかもしれない。が、帰って来られるという保証はどこにもない。ポータルから出てくるのはベネトナシュのようなモノケばかり。人間が戻ってきたという話は杳として聞かない。それは死人が生き返ることと同じだ。

探しに行きたい気持ちはわかるけど、と河合ヤスオは深い深いため息をつかずにいられない。生身の人間にとって冥界へのポータルとは死への扉。

(ひろが、未亡人になってまう、ってことじゃねえの……)

それは河合にとって、ひじょうに——なんていうか——願ってもない、いやいや、控えめに言って、微妙なシチュエーション、ではあった。

386. 踏み込む

ポータルの向こう側は暗闇だった。一緒だったはずのシパドとアマセオの姿も見えない。あんなに光り輝いていたのに。だが彼らの気配を、エネルギーとして感じる。

《ここは次元の緩衝地帯です》アマセオの声。《半分現世、半分あの世。どうです？ 気分は？》

ここがあの世なら自分は死んでいるということだ。健は頭を振った。実感がない。なんの感慨もわからない。

アマセオは声をたてて笑う。《でしょう？ 肉体にとって死は大事件ですが、魂にとってどうということはないんです。単に居場所が変わったというだけのことですから》

確かにそうかもしれない。けれど、あんまり事もなげに言われると不安を感じてしまう。やはり、"肉体にとって死は大事件"なのだ。

《緩衝地帯とは、いわゆる、はざまの世界だ。戻ろうと思えばまだ戻れるぞ》

シパドの声は笑いを含んでいるようだった。おもしろがっているのかもしれない。とはいってもテクトリやベネトナシュの無責任かつ悪意に満ちた面白がりようとは明らかに違っていた。彼女の身にいったい何があったのかと思いを巡らさずにいられない。

時間が限られていたこともあって、エドミールは率直にそのことを尋ねていた。シパドはただ、「学ぶべきことがたくさんあっただけだ」と答えていた。

そして去り際に、彼女はこう言い残した。「もう会うこともあるまい。そなたの記憶からも、そなたの周囲の状況からも、あたしの痕跡はすべて消える」

程なくして……エドミールのかつての結婚相手だった三人の女性たちは、何事もなかったかのようにそれぞれの人生を生きていた。と、いうことは、それらはすべてシパドの仕業だったということだ。かつて、ソフィア公女の身に起きた、あの、周囲から記録も記憶も消されるという不可解な現象が再び起こったのだった。

公女の場合、その魔の手が及ばぬ地へと逃走しなければならなかったが、エドミールはなんの憂いもなく、最高の伴侶と家庭を得ることができた。

ソフィアの兄一家が彼女のことを忘れなかったように、誰でも彼でも記憶が消されてしまうわけではなかった。なんらかの計らいなのか、特に絆の深い者に、その手は及ばないようである。ただ、ほかの誰か、あるいは記録と、自分の記憶が違うという違和感を持つのである。

シパドは面倒くさげに言う。「ベネトナシュにできた程度のことは、あたしにだってできるさ」

記憶と記録の消去及び書換え。シパドの手法はベネトナシュよりもずっと洗練されていたといえるだろう。

ちなみに、日本の〇〇放送二人組は、ポルタアウレア公国の大公妃葬儀の取材に際して、うっかりオフの皇太子殿下を撮影してしまっていた。殿下は婚約者とご一緒に、「今後一年間、生母の喪中のため、このこと(婚約)は内密に願いたい」と仰せられ、しかし、「婚約者の母国の報道機関にはしかるべき時期に、真っ先に取材に応じよう」と明言された。

〇〇放送の丸川主任と平井カメラマンによる葬儀取材は、彼らの帰国後、丁重に温存され、一年後、ポルタアウレア公国皇太子の婚約発表と共に公開された。葬儀取材の映像の中には銃を突きつけようとするこわもてのボディガードも、異世界の妖怪も光り輝く存在も、映ってはいなかったのだった。

387. 天の川の暗黒部分

貴殿も知っておられませんが、とアマセオは前置きして言った。
《テクトリが我が物顔で君臨していた冥界は、天の川の暗黒部分と重なっている。そのため》
《天の川の暗黒部分が冥界のように思われますが、実はそうではないんです》

*

そこまで聴いて、健は、もしや、と思った。以前旧友のマックス・ペイリーを尋ねたとき、彼はこんなことを言っていた。

『ちょっと独特の宇宙観を持っていた文化があっつな。

その文化圏では、星々をつないで神や動物、英雄の像として見ていた。このあたりほかの文化といっしょだが、彼らは、"星と星をつないだ像"は無生物・抽象的なものだ、と考えていた。そして彼らは、生き物は星々の密集の中に棲んでいると考えた。

わかるかい？ 星々の密集とはいうまでもなく天の川、その暗いしみの部分、つまり暗黒星雲は生き物だと考えていたんだ。それらにはちゃんと名前がついていた。曰く、蛇、カエル、鳥、ラマ、キツネ……』

健はうなずいたものだ。南半球の夜空に昇る天の川中心部には暗黒星雲が広がる。たしかにそれは北半球で見るよりはるかに、ずっと印象的だ。

人里を遠く離れた、人工光が全くない荒野の発掘現場で見上げるとホントに胸を打たれる、とマックス・ペイリーは言った。

『星と星をつないだ図よりも、無数の星の中の暗い部分がなんていうかこう、生き生きとした存在感をもって迫ってくるんだ。それらは生き物なんだととらえた人々の感受性にはまったく、恐れ入るよ。その文明は南米、アンデスのインカだ。メソアメリカのアステカ、マヤ文明に匹敵する、インカ文明だ』

*

アマセオは健の頭の中が見えるようだ。

《そう、インカ文明。あの地域も古い古い文明が底に存在します。天の川の暗い部分が地上の生き物に対応するという考えはまったくその通りなのです。聴いてください、健、冥界は死者のくになどではない、逆なのです》

逆？ 逆とは？

《ポータルをくぐられたイリチヤさまが、とても晴れやかな美しい場所にいたと、言いましたね。それこそが冥界の本来の姿だった。宇宙のはるかかなたからやってくる光が天の川の生き物を照らし、地球上に影を落とす。生命の影です。

そこは、古くは『9かける3番目の王国』という詩的な名で知られていました。

冥界とは、失意と後悔の間に落ちた冥界王様がご自身を自嘲してつけられた名前なんです》

《信じられないといった顔ですね》アマセオは明るい声で笑う。

《古代の転送システム、エネルギーシステムはその中に造られました。宇宙の祝福と地球の意思によって。あれはすべて人類のもの、人類のための遺産。居座って我が物とした大熊座の者たちが明け渡すのは当然のことであり、悪魔的存在(エンリル)の手に渡っていいものではありません》

《アマセオ》ふいにシパドの声が遮った。

《ベネトナシュがいない》

388. ベネトナシュ逃走

ポータルをくぐる時、ベネトナシュはたしかに一緒にいた。シパドとアマセオが両脇を固めていたはずなのだ。まさか、逃げられたのか！？

ふふん、とシパドは鼻を鳴らした。《捕縛の手を緩めれば奴はどうするか、試したのだ。その結果がこれだ》

《いったいどこへ》アマセオは慌てるふうでもなく、むしろのんびりと尋ねた。

《おおかた、エンリルのところではないか？ なにしろ、我々から結構な情報を得たからな、それを手土産にするなら、テクトリではなくエンリルに逃げ込むだろう》

健は思わず言った。「ベネトナシュが逃げると、わかっていたというのか！？」

シパドとアマセオが同時に首肯する。《そなたとて、感づいていたはずだ。奴の情報収集能力には大きな欠陥がある。肝心なことを聴いていない。見ていない。何にもまして、保身が優先される。そんな奴は信用できない。その一語に尽きる。それはエンリルとて同じはず》

「エンリルはそんな奴を手先につかっていたと？」

《重要視されていたとは思えん。ある意味、厄介払いで地上に送られたのだ》

「……酷いことをする。エンリルというのは血も涙もないな」

《健どの、思うのはご自由だが、それは感想に留めておきなさい。安易に同情などすると、あの手の奴はこっそり舞い戻って貴殿にとり憑くやもしれん》

《同感だな。まったく、正規のルートで大熊座へ戻れるところだったのに、我々の手を振り払って逃走とは。面倒見きれんわ。まあ、奴らしいというか》

アマセオもシパドも、ベネトナシュを追跡するとか捕獲するとかいう気はさらさらないのであった。

《これからどのような展開が待っていようと、彼自身が選んだ道。もはや傍(はた)からどうにもしようがありません》

《それを、本望、というのだ》

389. ハイヤーン博士

なじみのあるような、ないような、妙に懐かしい波動が近づいてくる気配があって、健は身構えた。なにしろ暗くてなにも見えない。しかし誰かがいるのがわかる。

その者が健の眼前で立ち止まり、まじまじと顔をのぞき込んできた。

《なんと。ヒューダー？》

「は？」

《やはり！ おお！ ヒューダー！ 私だよ！》

「ハイヤーン博士——」

*

ハイヤーン博士とは、数学者にして科学者、天文学者、生物学者。ほかに地質学、化学、医学、今日で言う自然科学の分野のあらかたを守備範囲としていた、ネウトラ評議会を代表する大学者だった。巨人族襲撃後は若いティコ博士の時代となり、ハイヤーンは追いやられた。¹

そのティコ博士のグループが巨人族対策として核爆弾を開発。拳句、アトランティス大陸を不毛の地に変えてしまった。そして、とぼっちりのようにダーヴェとヒューダーとは爆弾を開発した評議会の責任を負う羽目になったのだった。

*

《ん？ こんなところでなにをしているのだ、ヒューダーよ。そなたはたしか向こうの世界で経済学者やってたはずでは》

¹ Salamander in the circle 第七章 メッサナからの逃亡

ん？ オレがこんなところでなにをしているのかというより、この人はどうしてそんなことを知っているんだ？

《どうしてって。そなたの先祖、そなたの家系に経済、金融、数学を吹き込んだのはこの私だが？》

なんということか。ネウトラ評議会最高峰の大学者が楡山家の指導霊だったとは。

評議会時代のヒューダーは、このお人にけっこう痛い目に遭っている。直接の師はダーヴェだったが、その上に君臨していたのがハイヤーンである。ヒューダーは民族学の"ABC"だか、"いろは"だかをハイヤーンから叩きこまれたのだ。とにかく有無をいわせぬハードな学者先生だった。「そんな初心者向けのことから手ほどきしてもらえるなんて、幸せですよ」なんて、ダーヴェは慰めてくれたが、何度泣きながらレポートを作りなおしたかわからない。まあ、おかげで若くして立ちできたわけではあるけれども。

《何を言ってるのかねヒューダー、経済学を楡山家に伝授してくれと頼みこんできたのはそなたの方ではないか》

「え」

《この時代の経済は独特というか奇矯で、わたしゃ好かん。きみらのカレンダーで西暦1920年から1940年までの20年間に方向づけられたものを、我々はオカルト金融システムと呼んでおる。地球はこれによって支配されてしまった》

1920年から1940年——そのちょうど中間地点には、ぐるぐると蛍光ペンでしるしがつけられている。世界恐慌だ。

この時期、365日の太陽暦と260日の儀礼暦、584日の金星の会合周期(金星が太陽と地球と一直線に並ぶ周期)、52年(18,980日)の大熊座流星群の最大周期、アンベレオ・カレンダーにおいてこれらすべてが一致して一巡し、新たな周期が始まる日があった。複数の天体のエネルギーが利用され、強力に"方向づけられた"ものがあったのだ。

《ただの紙に印刷された紙幣と裏付けのない数字から成り、一部の者だけが堂々と得をする。金利を操作し、インフレを操作し、人々を生涯にわたる借金に縛り付ける。好況と不況をコントロールし、産業を破壊する。こんな詐偽じみたシステムが長続きするわけがない。遅かれ早かれ破綻する。金本位制(gold standard)こそが経済のあるべき姿である！》

「はあ」

《ま、楡山健はなかなかよくできた頭脳を持っていた。ご両親とご先祖にはよーく感謝したまえよ》

「あの、楡山健のことはともかく、ハイヤーン博士はどこで何を？」

《私か？ 私は世界のために働いておるのだ。かの大陸の破滅が避けられないとわかって、人類のリセットが敢行された。あの時は地球側のスタッフとして立ち会った。大洪水しかりピラミッド建設しかり、なかなか難儀な時代であった。なにかというと横槍を入れてくる勢力があつて、最近ではセルンにちょっかいを出してきたんで邪魔をしてやった……》

なんと相槌をうっていいものかわからないのと、ショックのあまり、「はあ」と「へえ」としか言えない健である。

マックス・ペイリーやレル・ヴァリスも絶対、本業の外で食いついてきそうな話ばかりだ。彼ら『超古代文明同好会』メンバーに共通しているのは、世界の歴史は何故、大洪水で線が引かれたのかという疑問だ。大洪水は、ヒューダーやレル・ヴァリスが生きていた時代より一万年も後のことだし、マックス・ペイリーにはそういう記憶がまったくないらしい。

というのに、ハイヤーン博士ときたら、その場に立ち会っていたと言うのだ。博士の口ぶりからすると、大洪水もピラミッド建設も、地球側とか地球外側とか、横槍を入れてくる勢力とか、なにやら複雑怪奇な構造と背景があるようではないか。

できるものなら今ここで『博士を囲んで質問攻めにする会』を開きたいところだが、あいにく健以外のふたりはまだ生者の世界にいるし、健本人はイリチヤを追っている真っ最中で、同行者バランケは健の足元で早く行こうと急かしている。

妙な質問だと思ったが、尋ねずにいられなかった。

「博士は今も、楡山家を指導してくださっているのですか？」

《いや。そなたがH&L財団に加わった時点で私の役目は終わったのだ》

「では——オレの息子は——」

《そなたの子世代はだな、もはや数字に支配されることはない。そう生きるべき時代なのだ。なあヒューダー、大熊座流星群が降り注ぐ時がやってきて、居座っていた連中は帰され、冥界は強力で浄化される。

『世界の守護者』の計画が実行され、世界の潮目は変わる。人は魂の要求に基づいて生きる。そういう時代へ、方向転換されるのだよ》

「それは——再び、大洪水のような激動が？」

《大洪水は人間を支配しようとした者と、支配に屈してしまった人間と、双方を初期化するものだったのだ。世界の再構築が試みられ、長い時がたち、世界は今再び、支配-被支配という同じ構図のなかにある。

あのような激動、かね。ありうるかもしれんな——》

水の元素霊たちが乱舞する。構造物を破壊し、記録を消すために。

390. 父と母と

ハイヤーン博士も、シパドもアマセオも、通りすがりの旅人のごとく背後に去って行く。夢の中にいるみたいで非現実感しかない。

最初、針先のような光の点が一步進むごとに大きくなり、少しずつ、周囲が明るくなってくる。真っ暗な緩衝地帯を抜けようとしている。バランケが小走りに足元をついてくる。

前方の柔らかな光に、期待と同時に不安を感じる。このまま進めば、どこへたどり着くというのだろう——どきどきと不穏な動悸を鳴らす左胸を右手でそっと押さえたとき、そこに何かを感じた。ジャケットの内ポケットにハガキ大の紙を忍ばせてあったのだ。『セーヌ河畔の青年』と題されたスケッチを。

ふいに、ぱあっと光が溢れ、目がくらんだ。眩しい。木蔭から夏の太陽の下に出たような眩しさ。前方に、人が立っている。その人は振り向いて健を見ていた。健はその人の背後を歩いていたのだ。若い男だ。その人は健に手を差し出し、屈託のない笑顔を見せて言った。「おいで」

言われるまま、健はその人に手を預ける。自分の目の高さがその人の腰のあたりなのに気がついた。大きな手が優しく握り返してくる。

ピアノの音。ベーゼンドルファーの深い音色。なぜか胸がいっぱいになって、しゃくりあげるように泣いている自分を健は感じている。

ピアノの演奏がやみ、蓋がされた。「あら。どうしたの、どうして泣いてるの？」

「あれ、今までご機嫌だったのに。どうしたんだ、ケン？ どこか痛いのか？ あ。わかった。良心が痛むんだ。ママのピアノに落書きなんかしたから」

「あらあら。へのへのもへじ付きのピアノはママの宝物なのに？」²

ケン首をふり、両手を高く差し出す。

「だっこ？ はいはい」

² リ・コンストラクション 第十四章 Cursed Principality

ピアノの向こうから現れたのは若い女性。額に黒髪がかかり、瞳は神秘的な深緑。どことなく既視感がある。そう、どことなく、エドミールの面影を感じる。

床に膝をついた女性の首に腕を回し。髪に顔を埋める。得も言われぬいい匂いがした。そのとき健は、あっ、と思った。なぜかわかってしまった。(このひとは、妊娠している)

「よしよし、ケン、いい子ね、泣かないで。ほら、ママはここよ、いつもいっしょよ」

優しい声が三歳のケンを愛撫する。彼はどうしようもない感情に流されてただ泣きじゃくる。この若い夫婦は二人目の我が子を見ることはなかった。もはや……ベネトナシュへの恨みなどどうでもよかった。彼は彼なりに己の行為の報いを受けるのだとわかっている。けれども、この若い夫婦がいったい何をしたというのだろうか。いったいどんな罪を犯したというのか。

ケンは母親の黒髪の向こうにピアノを見る。彼女の兄が本国から送ってくれたものだ。ああ、と呻かずにいられない。この大きな贈り物の移動が、彼女の居場所を明かしてしまったのだ。

彼は泣いた。彼女(ソフィア)に関わるすべてのもの、彼女の夫(コウイチ)、生まれることのなかった二人目の赤ん坊、彼女の兄夫婦(アランデルとマルガリータ)とその息子(エドミール)のために。

「外はいい風が吹いているよ、みんなで散歩に行こう。誘いに来たんだ」

コウイチは母子の傍らに膝をついて、ケンが泣き止むのを待っていた。

「すてきな考えね」ソフィアは言い、息子をぎゅうっと抱きしめて、そうっと揺すった。「散歩に行きましょう。きっと気持ちいいわ。あたし、帽子をとってくるから、外で待ってて」

彼女のたおやかな胸から離れるのは名残惜しかった。母なるひとの胸に抱かれる気持ちの良さを、健は生まれて初めて知ったのだった。

391. 扉の彼方

外ではブランケが待っていた。ネコではなく、ジャガーのブランケである。

コウイチは三歳のケンの背後に大きなエネルギーが寄り添っていることに気がついていたようだった。巨大なジャガーを見ても驚かない。動物園にしかいない猛獣のごとき動物が、頭を低くして礼をとる仕草を不思議そうに眺めている。

この先へ進むのを止められるのは親しい肉親だけだと、わかっている。

健は内ポケットから、例のハガキは避(よ)けて、名刺を取り出した。H&L財団の名刺。秘書のパウジーニに任せておいたら、肩書はしっかりと『総裁』になっていた。却下して『財務部』で作りなおしてもらおうと思いつつ、一枚だけ持ち歩いていたものだ。

コウイチはそれを興味深げに、そして、不思議そうに眺めている。

それもそのはず……H&L財団とは、コウイチの父、正悟が創設者。後継者に指名されていたコウイチだったが、興味がもてず、ヨーロッパを放浪、そのさ中に父が亡くなり、帰国した時は外国人少女を連れていた。なんの準備もできていなかったコウイチに替わって、セオデリック・ウイリアムスが代理人となった、そんな経緯がある。

コウイチはただ黙って健を見た。目の前にいるのは未来から来た彼の息子、ということか。

「——？」

「——」

父は言葉にならない問いを発し、息子は無言で応えた。

「——ママに、なんて言おう」

「なににも。これは貴方とオレだけの秘密です」

「僕にできることは？」

ケンも唇の片方を持ち上げて笑顔を作り、首を振った。コウイチは、そうか、とつぶやき、ほとんど同じ高さにあるケンの目をのぞき込んだ。

「僕の三歳の息子がどうしてこんな姿で現れたのか、僕にはわからないけど、これだけは言わしてくれ。きみはママとパパの宝物なんだよ」

言葉は穏やかだったが、いっしゅん、彼らの間に火花が飛んだ。ケンは居ても立っても居られなくなり、コウイチを抱きしめ、心を込めてつぶやいた。

「ありがとう。おとうさん」

バランケが立ちあがって歩み寄ってくる。

「元気で」

「きみも」

それが最期に交わした言葉だった。

「行くぞ。バランケ」

シャア、とジャガーは応じた。

体が膨れ上がるのを感じる。ヒューダーの力が重なり、ヒューダーの体が健にとって替わる。

彼らは地を蹴り、矢のように走った。バラムを求めてメッサナからルカティマへと駆けた、あの時のように。

最終章・「Beyond the Portal」

リ・コンストラクション 完

あとがき

一年前、2025年の2月に始まった『リ・コンストラクション』、最終回です。一年で終わるとは思っていなかったもので、ちょっと呆然、実感がわきません。ほんとにここで終わり？ イリチャや真は？ 筆者本人が疑問だらけなんですけど、物語のエネルギー的にここまでです。

面白いとか不思議とか、筆者はいくつか長い物語を終わらせていますが、脱稿日が誕生日と重なるということがあり、今回もそうでした。だから、これでいいのだ。(どいう理屈だ…)

今後は…これまでに書いてきたのをブラッシュアップして有料化したいのと、まあ、そんなことしてるうちに間宮真の物語や桧山健の帰還という話を書く気になるかもしれません。

なにはともあれ。読者さまあってこそその執筆でした。長い期間のおつきあい、ありがとうございました。心から感謝いたします。

2026年02月14日 記

奥付

リ・コンストラクション

最終章 Beyond the Portal

2026年2月15日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[freepik](#)

[imagescreate](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社